

〔資料〕

クロニックイネスにおける他者への「言いづらさ」 — 日本文学における近代小説に著わされた事象をふまえた論考 —

黒江 ゆり子 藤澤 まこと

The Difficulty of Telling to Others (‘Izurasa’) in Chronic Illness : Discussion on the Phenomena in Japanese Novels

Yuriko Kuroe and Makoto Fujisawa

I はじめに

筆者らはクロニックイネスにおける他者への「言いづらさ」の様相を明らかにすることを目的とし、まず慢性の病い（糖尿病：1型・2型、神経難病、炎症性腸疾患、精神障がい、HIV感染症）とともに生きる人々を対象に、R. アトキンソンによるライフストーリーインタビュー法に基づく聴き取り調査を行い（Atkinson, 2002）、インタビュー内容からその一人ひとりのライフストーリーを描くことで、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を導き、その内容を報告した（森谷, 2011）（中岡, 2011, 2013）（宝田ら, 2011a）（市橋, 2011）（河井, 2011）（田中, 2011）（黒江, 2011b）。

また、2012年には「言う人と言わない人に一線を引く」ことで、言うか言わないかの意思決定ができ、自分の人生のコントロールが可能になることを指摘し（黒江ら, 2012）、2015年には、7つのライフストーリーについて、具体的な「言いづらさ」の事象、その事象の先行要件（註①）、および帰結の視点から分析を行い、これらのライフストーリーの中には慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」が、「物事の始まり」（beginning）「混乱」（muddle）そして「決意／帰還」（resolution）という時間の流れの中に現れており、元型的な経験（註②）（アトキンソン, 2006）との繋がりがみられること、及び「言いづらさ」の事象に登場する人物は、家族（夫、娘、母親、父親、両親）、職場の人々、仕事関係の人々、友人、知己の人々、社会の人々、医師、看護師等であることを指摘した（黒江, 2015）。

その後、2017年には、日常における慢性の病いの体験が記述されている体験記を読み取り、「言いづらさ」の事象がどのように現れているかを探究するとともに、先述のライフストーリーから導かれた「他者への気遣い」「傷ついた体験」「仕事への影響の懸念」「病気の理解が難しい」「病気を説明する言葉が見つからない」「社会的偏見との遭遇」が先行要件として体験記にも現れていることを指摘した。また、ライフストーリーにみられた「言いづらさが『解ける（ほどける）』」と類似した事象でありながら、少し異なる「言いづらさが『超越される』」という事象がみられることを示し、自覚的に生きることや他者を助けることの知恵や力に一層強く繋がっていることを示唆した（黒江ら, 2018）。

そこで、今回は、わが国の文化における「言いづらさ」の様相についてさらに思索を深めるために、日本の文学作品の中でも日常が包摂されることの多い近代小説に焦点をあて、日常における「言いづらさ」がどのように著されているかを検討しようと思う。

なお、本稿における「言いづらさ」については、「言いづらさを伴う体験とは、本人の認識にかかわらず、『言わない』『言えない』『言いたくない』といった『言う』ことに抵抗や苦痛が生じていたと思われる体験」（宝田ら, 2011b）の考え方にもとづいて検討する。

II 日本の文学作品における「言いづらさ」

日本の文学作品から「言いづらさ」について探究するための作品選択に際し、安藤（2018）による「日本近代小説史」

を基盤として考えをすすめた。安藤によれば、「近代小説百数十年の歴史の中にはいくつか大きな転換期があるが、その一つが明治四十年を中心とする前後の数年間であったことは間違いない。(中略) 言文一致がようやく一般化すると共に「小説」にまつわるそれまでの概念が大きくゆらぎ、さまざまな表現形態があらたに模索され始めることになる。(中略) 夏目漱石が島崎藤村の「破戒」(明治三十九年)の文章の新しさをいち早く評価していたように、文学思潮や流派の対立といった観点からでは必ずしも整理しきれない可能性が、この時期の小説には胚胎していたのである」と指摘し(安藤, 2018, p63)、俯瞰されているように見えながら視点が登場人物に変換し、その人物の見えたとおりの風景が語られているとしている。また、「破戒」に続き、当時の文壇に決定的な影響を与えたのが田山花袋の「蒲団」(明治40年)であり、実生活を掘り下げることによって普遍をめざすモチーフは、「蒲団」以降、その後の「私(わたくし)小説」への道を切り開くことになったとし、藤村、花袋以外の主な自然主義作家として、徳田秋声、正宗白鳥、岩野泡鳴を示している(安藤, 2018, p66-74)。さらに、「ありのままに書く」という理念は、漱石と鴎外、この二人の執筆意欲をそれぞれの角度から刺激することになったとしている(安藤, 2018, p84)。

これらを踏まえ、日本文学の自然主義が、理想化を行わず、醜悪、瑣末なものを忌まず、現実のただあるがままに写しとることを目標とする立場であること(新村, 2008)、現実的な立場に身をおき、人間を追究していること(小西, 2018, p119)、及びこの当時の自然主義が自己の内なる自然と外なる大自然との感応という、優れて東洋的な生命観がその背景にあったこと(安藤, 2018, p69)等をふまえ、わが国における人々の実生活を描いた初期の作品として、今回は、藤村、花袋、秋声、白鳥、泡鳴、鴎外の6人に焦点をあて、その中から代表的な作品を選択し(表1)、安藤の示唆に沿って示し、今後に繋げたいと思う。また、夏

目漱石については、筆者らの2015年の論文において「こころ」を読み取りながら検討をすすめたことから(黒江, 2015)、先行要件と帰結のところで含めて論考しようと思う。

1 「破戒」と「蒲団」における「言いづらさ」

1) 小説の概要

「破戒」では、父親から身分を隠せと堅く戒められていた丑松は、師範学校を出て学校の教員をしており、生徒たちにも慕われていた。しかし、同じ下宿の住人が出身を知られ、入院していた病院からも下宿からも追い出され、その場に居合わせた丑松は、近隣の人々の激しく罵る姿を見ることになる。同じ背景をもつ解放運動家の蓮太郎の死に心を悩ますとともに、自分の出身について語らざるを得ない状況に至る(島崎, 2015)。

また、「蒲団」は、文学者である時雄が日常に単調さを感じていた頃、彼の著作の崇拜者である女学生の芳子から弟子(書生)になりたいという手紙を受け取る。芳子がまだ学生であることから一度は断るが、芳子からの再三の依頼と芳子の両親からの依頼に弟子(書生)として迎える。しかし、同じ屋根の下に暮らすうちに、時雄はしだいに芳子に思いを寄せるようになり、妻、芳子、芳子の恋人(学生)、芳子の両親との間で苦悩を続ける(田山, 2018)。

2) 「言いづらさ」のストーリー

(1) 「破戒」における言いづらさ

「破戒」における「言いづらさ」のストーリーは、丑松が師範学校で教育を受け、当時の社会が抱いている偏見に気づいていくことから始まる。それまでは父の言葉に従って過ごし、意に介さずに生きてきたが、次第にその言葉の意味の大きさに気づかされる。思いが逡巡するなかで、尊敬する先輩(蓮太郎)にだけは話をしようと決意するのだが、その先輩が選挙応援活動のさなかに人に襲われ死に至り、語るができなくなる。その後、対立する選挙陣営から噂を流され、職場(学校)の人々に伝えなければなら

表1 本論において日本文学における「言いづらさ」を論考した近代小説

著者(出版年)	書籍名(発表年)	主な登場人物
島崎藤村(2015)	破戒(明治39年)	丑松, 銀之助(親友・同僚), 蓮太郎(尊敬する先輩)
田山花袋(2018)	蒲団(明治40年)	時雄, 芳子(弟子・女学生), 田中(芳子の恋人), 時雄の妻
徳田秋声(1995)	新世帯(明治42年)	新吉, お作(妻), お国(新吉の友人の妻)
正宗白鳥(2006)	入り江のほとり(大正4年)	辰男, 勝代(妹), 栄一(長男), 良吉(弟), 才次(兄)
岩野泡鳴(2014)	耽溺(明治42年)	田村先生(僕), 吉弥(芸者), 妻, 僕の父, 妻の母
森 鴎外(2014)	雁(大正3年)	お玉, 未造(檀那・高利貸し), お玉の父, 岡田(学生), 僕(学生)

ない状況に追い込まれ、居場所を失う。

丑松は、自分の出身について、職場（学校）の同僚や上司、生徒、思いを寄せる人等に話すことができないのだが、彼の思い悩む様子を深く心配した銀之助（親友であり師範学校の同級生であり同僚）や尊敬する先輩であってもやはりそうであった（表2）。

(2)「蒲団」における言いづらさ

時雄は弟子（書生）である芳子にいつしか恋心を抱くようになるが、妻のある彼にとって、そのことは公然とできるものではなかった。時雄はその思いを自分の胸のうちにしまい込み、同様に彼の妻も時雄に問いたずらすることはできなかった。時雄は、芳子の両親から依頼された立場もあって、芳子と恋人（学生）との関係が気になり、芳子に説明を求めるが、芳子はうろたえ、恋人との関係をその場で説明することはできず、口ごもる。そして手紙で伝えようとする。時雄、妻、芳子の三者三様の言いづらさがみられる（表2）。

2. 「新世帯」「入り江のほとり」「耽溺」における‘言いづらさ’

1) 小説の概要

「新世帯」は、東京に出てきて酒問屋で10年以上懸命に働いた新吉が、小さい家を借りて新店を出した頃、官吏の屋敷で奉公していたお作を妻に迎える。開店したばかりの酒屋の経営に精を出す新吉だが、気立てはいいが仕事の呑み込みが悪いお作に腹を立てる。お作がお産のために実家へ帰った留守の間に、お国（新吉の友人の妻）が新吉の家

に夫のことで相談に来て、そのまま居座り、内儀さん気取りで入り浸るようになる。お作が実家から戻ると三人での気まずい同居生活となる（徳田，1995）。

「入り江のほとり」では小学校の教員をしている辰男は、妹の勝代、弟の良吉、兄の才次家族、両親らと暮らしている。旧家の大家族である。東京の大学を終え奈良に出ている長男の栄一から、帰省する旨の葉書が届くが勝代だけが気に留める。辰男は少し風変わりで、決まった時刻に職場（学校）から戻ると自室に籠って独学で英語を勉強している。この英語が世間に通用すると家族は思っていない。良吉や父や栄一からは英語の勉強をするのではなく、正教員の試験勉強をするようにと厳しく忠告される（正宗，2006）。

「耽溺」は、戯曲を書くために友人の紹介で、寺の一室を借りて仕事に没頭するつもりであった田村先生（僕）が、寺に行ってみるといろいろ取り込みがあるとのことで別の家に置いてもらうことになる。その家の隣が料理屋で、この料理屋は一人の芸者を抱えている。田村先生はこの芸者に思いを寄せはじめ、そこでの散財が妻に知れることとなり、実家に戻り、妻、妻の母親、自分の父親を巻き込み混乱となる（岩野，2014）。

2) 「新世帯」「入り江のほとり」「耽溺」における言いづらさのストーリー

「新世帯」では、酒屋の仕事に一向に役に立たないお作に対して、夫の新吉は次第にぷりぷりと怒り、店には出ないで引っ込んでいろと罵るようになる。お作はそんな夫におどおど話しをするようになり、その思いを叔父に伝え

表2：「破戒」（島崎，2015）、「蒲団」（田山，2018）における言いづらさ

	言いづらさの事象 / 体験（記述例）	登場人物
「破戒」 (島崎，2015)	「何故君は沈んでばかりいるのかねー体、君は何を考えているのかね」「僕かい？ 別にそう深く考えてもないさ。君らの考えるような事しか考えていないさ」（中略）「どうしたい、君は」と銀之助は不思議そうに丑松の顔を眺めて「ははははは、妙に黙ってて了ったねえ。」「ははははは。ははははは。と丑松は笑い紛らして了った。(p54-55)	丑松、 銀之助（親友）
	言おう言おうと思ひながら、何かこう引止められるような気がして、丑松は言わずに風呂を出た。(p163)	丑松、 尊敬する先輩
	「何故人の真情はこう思うように言い表すことのできないものであろう。その日というその日こそは、あの先輩に言いたい言いたいと思って、二度となく二度となく自分で自分を励まして見たが、とうとう言わずに別れて了った。(p196)」	丑松、 尊敬する先輩
「蒲団」 (田山，2018)	1ヶ月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置く事の不可能なのを覚った。従順なる家妻はあえてその事に不服も唱えず、それらしい様子も見せなかったが、しかもその気色は次第に悪くなった。限りなき笑い声の中に限りなき不安の情が充ち渡った。(p19)	時雄の妻、 時雄
	翌朝時雄は芳子を自宅に伴った。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知ろうと思ったけれど、芳子が低頭勝（うつむきがち）に悄然として後についてくるのを見ると、何となく可哀そうになって、胸に苛々する思を畳みながら、黙して歩いた。(p49)	時雄、 芳子（弟子）
	ある時はこの一伍一什（いちぶしじゅう）を国に報じて一挙に破戒して了おうかと思った。けれどこの何れも敢えてすることの出来ぬのが今の心の状態であった。(p60)	時雄、 芳子の両親
	「先生、後生ですから」と祈るような声が聞こえた。「先生、後生ですから、もう、少し待ってください。手紙に書いて、さし上げますから」（中略）暫くして下女は細君に命じられて、二階に洋燈を点けに行ったが、下りて来る時、一通の手紙を持って来て、時雄に渡した。(p98)	芳子、時雄

*註：点線下線部は、言いづらさが著されている箇所。表3も同様。

よと思うが、できない。その一方で、夫の新吉も流産の際にお作のもとを訪れることができなかったことを話せないのである。

「入り江のほとり」では、家の中でいつも独りで何かをやっている辰男は、妹や兄に対して自分の思いを伝えることができない。家族はそんな辰男の心の中を量りかね、田畑を分け与えて抛って置こうと誰も気につけない。また「耽溺」では、芸者に散財していることを時雄は妻に隠し続けるが、とうとう妻の知れることとなり、実家に戻った時に妻、妻の母や自分の父に事情を言うに言えず、また妻の母もそのことを聞くことができない(表3)。

3. 「雁」における「言いづらさ」

1) 小説の概要

母親が亡くなり、その後貧しいながらも父親に大切に育てられたお玉は、見染められて結婚した夫(警官)に妻子

があることがわかり、自殺をはかる。その後、高利貸しの未造に望まれて、その妾になる。女中と二人暮らしのお玉は、学生の岡田と挨拶を交わすようになり、しだいに心を寄せるが、岡田は研究のため海外に立つ(森, 2014)。

2) 「雁」における言いづらさのストーリー

自分の檀那が高利貸しであることを知ったお玉は驚き、その事を父親に話そうとする。しかし、新しい住まいで平穩に暮らしている父親の様子を見て、苦勞して自分を育ててくれた父親が気に病むようなことは言わずに、自分の胸にしまっておこうと決心する。その頃、お玉の家の前を毎日通る学生(岡田)と挨拶を交わすようになり、お玉が飼っている小鳥を狙ってきた蛇を退治してくれたその学生にお礼の言葉をかけようとするが、言えないまま学生の留学が決まる(表3)。

表3: 「新世帯」「入り江のほとり」「耽溺」「雁」における言いづらさ

作品名	言いづらさの事象 / 体験 (記述例)	登場人物
新世帯 (徳田, 1995)	「でも此の間、和泉屋さんが行った時、その方が一人で宅を切廻してゐたとか…何だか其様やうなお話を。小石川の叔父さんに為してゐたようですよ。」とお作は怖々(おぞおぞ)と言った。(p50)	お作, 新吉
	其れなら切(せ)めて初七日にでもいらしてくださいとすれば…。」とお作は目に涙を一杯溜めて怨んだ。「それに貴方は、お國さんのことと言ふと、家のことはうちぢやなくても…。」と旦那の中でブツブツ言った。(p58)	お作, 新吉
	新吉は横を向いて黙って居た。(中略)此の一月ばかりの新吉の胸の悩ましさと云うものは、口にも辞(ことば)にも出せぬ程であった、其の苦しい思いが、なんでお作に解らう。お作はとてもしやういふことを打ち明ける相手ではないと、そう決めて居た。(p59)	新吉, お作
入り江の ほとり (正宗, 2006)	「あの、ちょっと小石川へ行って来てもう可(よう)ございますか。」と怖々(おぞおぞ)云うと、新吉はジロリと其の姿を見た。「何か用かね。」お作は明白(はっきり)返辞も出来なかつた。出てはみたが、何となく足が重かつた。叔父に厭な事を聞かすのも、気が進まない。叔父に色々訊かれるのも、厭であつた。叔父の處へ行けないとすると、差当り何處へ行くと云う的(あて)もない。(p69) *注: 常用漢字にないものの一部は常用漢字に変更、あるいはよみがなで表記した。	お作, 夫, 叔父
	「晩までに勝にこのテーブルを貸しておくれな。腰を掛けて勉強したら、お腹がよう減つて気持ちがよくなるかもしれないから。」「…。」辰男は自分の机や椅子を他人に一たとい妹であつても一使われるのが厭であつたが、他人に向かつて一たとい妹であつても一否と断言することはできなかつた。むろん快い承諾を与える気にもなれないのだが。…(p200)	辰男, 勝子(妹)
耽溺 (岩野, 2014)	「何か望みや不平があるのなら明ら様に云つたらいいじゃないか。おれが立つ前に聞いていたら、多少おまえの爲になる様な事があるかもしれないぜ」と栄一は柔しく訊いて弟の心の底を索ろうとしたが、「そんなことは他人に云うたつて仕方がありません」と、辰男は冷やかに答えた。押し返して訊いても執念(しゅえん)く旦那を嚙んで、よそ目には意地悪く見えるような表情を口端に漂わせた。(p223)	辰男, 栄一(兄)
	父は僕に対してすこぶる厳格な態度になり、「今度のことはどうしたと言うんだ?」「…。」僕は少し心を落ち着けてから、父の顔を見見い答えた。「このことは何にも聴いて下さんな、自分が苦しんで、自分が処分をつけるつもりですから」「そうか」と、父は僕の何も言わない決心を見て取つたのだろう、「じゃア、もう、今日は遅いから帰る。あす、早速うちまで来てもらいたい。」(p98)	僕(田村先生), 僕の父
雁 (森, 2014)	妻の母は心配そうな顔をしているが、僕のこと何にも尋ねないで、孫どもが僕の留守中にいたずらであつたことを語り、庭のいちじくが熟しかけたので、取りたがつて、見ていないうちに木のぼりを初め、途中から落つちたことなどを言つつけた。(p101)	僕, 妻の母
	きょう話そうと思つて来た事を、話せば今が好い折だとは思ながら、切角暮らしを楽にして、安心させようとして居る父親に、新しい苦痛を感じさせるのがつらいからである。(中略)今一つある秘密を、ここまで持つて来たまま蓋を開けずに、そっくり持つて帰らうと、際どいところで決心して、話を余所に洩らしてしまつた。(p56-57)	お玉, 父親
	しかし、その檀那と頼んだ人が、人もあるうに高利貸しであつたと知つた時は、余りのことに途方に暮れた。そこでどうも自分ひとりでは胸のうやもやを排し去ることが出来なくなつて、その心持を父親に打ち明けて、一緒に苦しみ悶えてもらおうと思つた。そうは思つたものの、池の端の父親を尋ねてその平穩な生活を目のあたりに見ては、どうも老人の手にしている杯の裡に、一滴の毒を注ぐに忍びない。よしやせつない思いをしても、その思いを我が胸一つに畳んで置こうと決心した。そしてこの決心と同時に、これまで人にたよることしか知らなかつたお玉が、始めて独立したよな心持になつた。(p85)	お玉, 父親
そう、そう。その時わたしは慥(たし)かに物を言おうとした。唯何と云つて好いか分からなかつたのだ。(p111)	お玉, 岡田(学生)	

Ⅲ 日本の近代小説における‘言いづらさ’の先行要件と帰結

‘言いづらさ’についてのライフストーリー及び体験記から先行要件として導かれた〔他者への気遣い〕〔傷ついた体験〕〔仕事への影響の懸念〕〔病気の理解が難しい〕〔病気を説明する言葉が見つからない〕〔社会的偏見との遭遇〕を基盤として、小説にみられる‘言いづらさ’について考察を深めたいと思う。クロニクイルネスにおける「言いづらさ」は、アトキンソンの指摘する元型的な体験として説明が可能であることから、限られた状況のみにみられる事象ではなく、私たちすべての人々の人生や状況に関わるものとなり、日本の文化の中にも在り続けていると考えるからである。但し、小説の設定は必ずしも病気状況ではないことから、ここでは、〔病気の理解が難しい〕を〔状況の理解が難しい〕、〔病気を説明する言葉が見つからない〕を〔説明する言葉が見つからない〕として考える。

1. 他者への気遣い

クロニクイルネスにおける〔他者への気遣い〕は、自分が病気について話しをすると家族が心配する、及び自分が病気の話をすると相手が戸惑う等が示されている（黒江，2015）。小説においても、自分が話しをすることで相手が困惑するような状況で口を噤む情景が描かれている。例えば「蒲団」の時雄は、問いただそうとしていた芳子（弟子）が塞ぎこんでいる姿を見て、自分がこれ以上話すことで相手をさらに追い詰めることになると思い黙して歩く。また、貧しくも父親の手で大切に育てられた「雁」のお玉は、その父が新たな住まいで、これまでに無いほどの平穏な暮らしをしている姿を見ると、自分の檀那が高利貸しであるというお作にとって驚きの事実を話すことができない。お玉は父を煩わすことはできないという思いから自分の胸にしまっておこうと決心する。「そしてこの決心と同時に、これまで人にたよることしか知らなかったお玉が、始めて独立したような心持になった。」（森，p85）と著される。

また、「こころ」の先生は、自分と友人との間にあったことは、妻のことを考えると誰にも話すことができない。それは、「私は思い切って、ありのままを妻に打ち明けようとしたことが何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を押しさえつけるのです。（中略）・・・私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです。」（夏目，

1991，p261）と著わされている（黒江ら，2015）。先生は、誰にも話さないという決意のもとで償いの日々を送り、時に自分の今の状況をばちがあたつたと表現し、話してもいい人を見つけ遺書に全てを書き記し送る。

2. 傷ついた体験

クロニクイルネスにおける〔傷ついた体験〕は、診断時に涙を流す母親を見た、病名を言うと根ほり葉ほり聞かれた、説明しても分かってもらえない、及び友人と別れるときに同情でつき合っていたと言われたこと等が示されており（黒江ら，2015）、これらはすべて、本人にとって思いもよらない他者の言動であった。小説においても、夫に罵られる、流産しても夫が実家に来てくれない、悲惨な状況で下宿を退去させられる仲間を見た、自分の将来への思いを話しても意に介されない等が著され、これらは、やはり本人にとっては思いもよらない他者の言動である。

例えば「新世帯」のお作は、官吏の屋敷で奉公していたときは、奉公先の主人に褒められ重宝がらされていた。ところが新吉に嫁いだ後は、夫の新吉に役に立たないと再三再四罵られるようになる。その頃から、お作は夫に何か言おうと思っても、おずおずと話しをするようになる。さらに、流産した時に夫が実家に来てくれることはなく、日にちが経過してから夫が来た時にお作は涙を溜め怨む。また、「入り江のほとり」の辰男は、兄の栄一はもとより、妹にも自分の思いを伝えることができない。辰男のこの言いづらさに繋がる事柄は明確に著されていない。しかしながら良く読み取ってみると、辰男は以前に、バイオリンを習って音楽家になりたいと家族に話したことがあるが、その時家族はその話に全く取り合わなかったのである。それ以降、辰男は変り者として存在している。

3. 仕事への影響の懸念

クロニクイルネスでは、家族の病気のことを話す事業の継続が難しくなると考えて「言わない」ことを決断し、病気でないかのように装う等が示されている（黒江ら，2018）。小説においては、例えば「破戒」の丑松の言いづらさは社会的偏見とも繋がっているが、彼の心情として「社会から捨てられるということは、いかに言っても情けない。（中略）もしそうになったら、どうしてこれから将来生計が立つ。何を食って、何を飲もう。自分はまだ、青年だ。望みもある、願いもある、野心もある。ああ、ああ、捨てられたくない。」（島崎，p348）と著され、言うことで仕事

を失う懸念が示されている。

4. 状況の理解が難しい

クロニクイルネスでは、病気を診断された時に、その病気が何を意味しているかがわからずに戸惑う経験等が示されている(黒江ら, 2015)。小説においては、例えば「新世帯」の新吉は、妻のお作が実家に戻り流産したときに、実家にいくべきかどうかで実は深く悩んでいた。実家に来てくれなかったことをお作に責められ、新吉も詳しい話を訊いてみると、なんだか自分ながら空恐ろしいような気もした。「私はまた、如何せ死んでるんだから、なまじいい顔でも見ちゃ、反って好い心持ちがしねえだろうから、見ない方が優(まし)だと云う考で・・・」と言いつづける(徳田, 2006, p58)。「むろん流産のことを想い出すと、病気に取り着かれるようであった。彼奴(やつ)も可哀さうだ、一度は行って見てやらなければ・・・と云う気はあっても、さて踏み出していく決心ができなかった。明日は明日はと思ひながら、つい延引(のびのび)になってしまった。頭脳(あたま)が三方四方へとられているようで、此の一月ばかりの新吉の胸の悩ましさと云うものは、口にも辞(ことば)にも出せぬ程であった」と著わされ(徳田, p59)、流産という状況をとらえることに戸惑う姿が描かれている。

5. 説明する言葉が見つからない

クロニクイルネスでは、病気であることについて「どこがどのように具合が悪いのか」と職場の人々に聞かれ、仕事ができないほどの倦怠感をどのように説明すればいいのかわからないこと等が示されている(黒江ら, 2015)。小説においては、例えば「蒲団」の芳子は、自分の恋人との関係を時雄や親に隠して、交際を続けていたが、ある日、時雄に恋人との関係を問い詰められて答えることができない。思いもよらないことで、説明する言葉が即座には見つからず、少し時間をもらって、手紙にしたためるのである。また、時雄の妻も、時雄と芳子の関係が気になっている様子だが、それを言葉にすることはしない。おそらくどのような言葉にすればよいかのかわからないとか、それを言葉にしたときに時雄がどのような反応をするかわからないことへの懸念等と思われ、それは「聴きづらさ」にも繋がるであろう。さらに、「雁」のお玉は、学生の岡田に小鳥を救ってもらったお礼を伝えたいと思うのだが、顔を会わせるとなんと表現していいのかわからなくなり、伝えること

ができない。

6. 社会的偏見との遭遇

クロニクイルネスでは、職場で病名を隠して働き、しんどくて憂鬱的な気分になっても病気のことは言わなかったことについて、社会における人権的な差別や病気の差別の影響を感じ、語れない事柄となる等、社会における多様な偏見について示されている(黒江ら, 2015)。小説においては、例えば「破戒」の丑松は、自分の出身について親友(師範学校の同級生で同僚)にも尊敬する先輩にも話すことができない。彼は、師範学校で教育を受けることにより、当時の社会が有している偏見に気づかされる。同時に、そのような偏見のある社会で生き抜くための心構えを父親から厳しく伝授されていた。それは、彼の家族や親族が固く守り続けてきたものであり、家族や親族のことを考えると決して自分が破る訳にはいかないものでもあった。さらに、先の傷ついた体験で述べたように、同じ下宿の住人の出身が知られたことで、その住人が悲惨な状況で退去を迫られる現場に彼は遭遇する。彼の苦悩は日に日に深くなり、尊敬する先輩にだけは話をしようと決心するが、言葉にできず、先輩の不慮の死によって、その機会を失う。そのうちに学校の校長らに説明しなければならぬ状況に追い込まれ、居場所を失い、新たな居場所を求めて海外に立つ。すなわち、ここでは、社会的偏見との遭遇、他者への気遣い、傷ついた体験、説明する言葉が見つからないが複層的に渦巻いている。

また、「雁」のお玉にとって「高利貸し」という職業は望ましいものではなく、それは同時に自分が偏見を抱いていることでもあった。だからこそ、それを父に言うかどうかで苦悩する。ここでも、社会的偏見との遭遇は、他者への気遣いと複雑に繋がっている。おそらく、私たちの言いづらさは単一の先行要件によって成り立つのではなく、複数の要件が複雑に絡まることによって、その人自身の言いづらさがかたち作られると思われる。

さらに、クロニクイルネスにおける「言いづらさ」の帰結としては、演技する生活、人間関係の希薄化、居場所の喪失、自己成長の停滞、経費の工面等がみられている(黒江ら, 2015)。「蒲団」の芳子は恋人との関係が深いものではないと装い、「新世帯」のお作は夫との関係が希薄化し、「こころ」の先生と妻の二人の内面は共有できない部分が存在し、妻には理解できない溝ができる(黒江, 2015)。

また、「入り江のほとり」の辰男は自分の部屋に閉じこもり語らない生活を続けることで自己成長が停滞し、「耽溺」の田村先生は散財の経費の工面に苦悩し、「破戒」の丑松は話す人と話さない人に一線を引こうとするが叶わず、意図しなかったところで話すことに追い込まれて居場所を喪失する。

おわりに

今回取り上げた近代小説の中には日常における多様でかつ重厚な言いづらさが著されていた。そしてその先行要件には、他者への気遣い、傷ついた体験、仕事への影響の懸念、状況の理解が難しい、説明する言葉が見つからない、社会的偏見との遭遇が存在し、時にそれらが複層的に絡まっている。また、これらの言いづらさの登場人物は、親友、尊敬する先輩、慕う人、師匠、家族（夫、妻、兄、妹、父）、職場の人々等であり、いずれも身近な人々である。また、「言いづらさ」とともに「聴きづらさ」の存在（「蒲団」時雄の妻や「耽溺」の妻の母のように）にも気づかされる。

社会的圧力に追い込まれて話した後自分の居場所を失うことになった「破戒」の丑松は、「自分はそれを隠そう隠そうとして、持って生まれた自然の性質をすり減らしていた。その為一時も自分を忘れることができなかったのだ。思えば今までの生涯は偽りの生涯であった。」（島崎, 2015, p369）と語る。その一方で、父には絶対に話さないという「雁」のお玉の一大決心は、彼女を自立へと導き、囲われている身から自由になりたいという想いに繋がっていく。

「言いづらさ」でみられる‘話す人と話さない人に一線を引く’という行為は、語ることを選択を自分のもとに置くことであり、他者に強要されるものではない。話すことを他者から強要されるのではなく、誰にどのように話すかあるいは話さないかを自分で決定することができれば、それは、自分で自分の人生をコントロールし、自覚的に生きることとなり、‘生きようとする強さ’に繋がると感じる。これらについては、実生活を掘り下げることによって普遍をめざすモチーフを探究しながら、今後も考えていきたいと思う。

註①：ここで示す“先行要件 (antecedents)”は、特定の概念の発生に先立って生じる出来事や例を意味し、“帰

結 (consequences)”は、その概念が発生した結果として生じる出来事や事件を意味する（黒江ら, 2015, p117）。

註②：R. アトキンソンは、人間がもつ伝統的なストーリーは、時空間的な要素を共有し、すべての人間の人生や状況に関わるものとなることを指摘している。これらのストーリーには、メタファー、シンボル、元型、モチーフ等があるとし、個人のライフストーリーにおける元型とモチーフ（カッコ内）として別離（冒険への呼びかけ、後退等）、行動（より大きな困難、復活と再生等）、帰還（責任の容認、自覚的に生きること等）を示し、それぞれにおける元型的な経験を著している（アトキンソン, 2006, p29-30, p140-155）。

謝辞

本稿は、平成 28-31 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究課題番号 23702 「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』を基盤とした看護理論の創生とその活用」の一部として記述されたものであり、次の研究者によるものである：黒江ゆり子、宝田穂、市橋恵子、田中結華、藤澤まこと、中岡亜希子、森谷利香。

本稿の執筆に際して、お世話になった方々に深く感謝申し上げます。

利益相反について

本稿における利益相反はありません。

文献

- 安藤宏. (2018). 日本近代小説史 (第4版). 中公選書.
- Atkinson, R. (2002). The life story interview. In Gubrium, J. F. & Holstein, J. A. (eds.). Handbook of Interview Research : Content & Method. (pp.121-140) Sage Publications.
- Atkinson, R. (2002/2006). 黒江ゆり子, 北原保世, 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」についての研究グループ訳, ライフストーリーインタビュー. 看護研究, 39(5), 81-100.
- Atkinson, R. (1995/2006). 塚田守 (訳), 私たちの中にある物語 (初版). ミネルヴァ書房.
- 市橋恵子. (2011). HIV 感染をもつ D さんのライフストーリー. 看護研究, 44(3), 274-279.
- 岩野泡鳴. (2014). 耽溺 (初版). 青空文庫 POD[NextPublishing].
- 河井伸子. (2011). 2 型糖尿病の E さんのライフストーリー.

- 看護研究, 44(3), 280-284.
- 小西甚一. (2018). 日本文学史(第32刷). 講談社.
- 黒江ゆり子. (2011a) 慢性の病いにおける他者への「言いつらさ」に関する看護学的省察. 看護研究, 44(3), 227-236. (受稿日 平成30年8月27日)
- 黒江ゆり子. (2011b). 1型糖尿病のFさんのストーリー. 看護研究, 44(3), 285-292. (採用日 平成31年1月9日)
- 黒江ゆり子, 宝田穂, 市橋恵子ほか. (2011). 7つのライフストーリーに描き出された他者への「言いつらさ」. 看護研究, 44(3), 298-304.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと. (2012). 慢性の病いと他者への「言いつらさ」—糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描きだすもの—. 岐阜県立看護大学紀要, 12(1), 41-48.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと. (2015). 慢性の病いにおける言いつらさの概念についての論考—ライフストーリーインタビューから導かれた先行要件と帰結—. 岐阜県立看護大学紀要, 15(1), 115-121.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと. (2018). クロニックイルネスにおける他者への「言いつらさ」—病いにおける体験記をふまえた論考—. 岐阜県立看護大学紀要, 18(1), 135-142.
- 中岡亜希子. (2011). パーキンソン病をもつBさんのライフストーリー. 看護研究, 44(3), 262-267.
- 中岡亜希子. (2013). パーキンソン病者における病いについての他者への「言いつらさ」. 大阪府立大学看護学部紀要, 19(1), 63-72.
- 夏目漱石. (1991). こころ(第1版). 集英社文庫.
- 正宗白鳥. (2006). 何処へ 入江のほとり(第2刷). 講談社.
- 森鷗外. (2014). 雁(第117刷). 新潮社.
- 森谷利香. (2011). ミトコンドリア脳症患者の在宅療養における主介護者であるAさんのライフストーリー. 看護研究, 44(3), 257-261.
- 島崎藤村. (2015). 破戒(第140刷). 新潮社.
- 新村出. (2008). 広辞苑(第六版). 岩波書店.
- 宝田穂, 古城門靖子. (2011a). 精神障がいに対するセルフステイグマから解放されたCさんのライフストーリー. 看護研究, 44(3), 268-273.
- 宝田穂, 黒江ゆり子, 市橋恵子ほか. (2011b). 「言いつらさ」は何を意味するのか. 看護研究, 44(3), 305-315.
- 田中結華. (2011). クロウン病のGさんのストーリー. 看護研究, 44(3), 293-297.
- 田山花袋. (2018). 蒲団・重右衛門の最後(第86刷). 新潮社.